一般部門

よかったよかった

【大阪府・糀谷終一（こうじたに　しゅういち）】

一般部門
入 選

「えっ、出たの？ いいわよ、いいのよ。それにしても、よかった、よかったわね。これでお腹もほっとしてるわよ」

昭和55年、交通事故で首から下がまひし、その後遺症で排便疾患になった。薬を飲んでもすっきりとは出ず、その日も便秘日数は8日目になっていた。中枢神経を損傷しているため腹筋が付かない。そのため力んでも搾り出すまでにはいかず、医師は車いすをしっかりこげば腸の運動になるから良いと言ってくれた。しかし、手も指もまひしている私にはその気にもなれず見送って来た。

3月も半ば過ぎ、天気がとても良かった。病棟の看護師さんが、散歩でもしたらと言ってくれる。私も気分転換になるかと思い、病院の周りを回ってみることにした。それが私にとって地獄を見ることになってしまった。

30分の散歩後、病室に戻る途中で急に下腹部に異変が起った。変だと思ったその瞬間、車いすの上で脱糞。車いすをこぐごとに脱糞が続く。私は臭いを撒き散らしながら帰院。看護師さんに恐る恐る「出てしまった」と声を詰まらせながら言った。看護師さんは「いいのよ」と笑みを浮かべながら、便をシャワー室で簡単に処理をする。私の縮こまった心がどんどん解けていった。

人は見せたくない羞恥（しゅうち）、自己嫌悪を持っている。それゆえ失敗をした時は、口に出せないつらさがある。それを看護師さんが、まるで母親が子どもに言うように、優しい言葉で包んでくれる。

私は看護の世界が、いかにメンタルな世界を大きく受け持っているかを知った。そして、看護師さんが常に患者の立場に立って接し、患者にどれほど心の安堵感を与えているかを、大失敗から身を持って体験できた、唯一の事件であった。